

東金堂

国宝

歴史上、興福寺の伽藍の中央には3つの金堂があった。中金堂と東金堂、西金堂である。東金堂は聖武天皇（701～756年）の命により、その叔母である元正上皇（683～748年）の病気回復を祈願して建立された。726年に完成すると、医の仏陀として知られる薬師如来と、その脇侍である日光菩薩と月光菩薩が中央の祭壇に祀られ、その他の仏像も設置された。さらに、祭壇は緑色の釉薬のタイルでおおわれ、薬師如来が住む浄瑠璃浄土を再現していた。何世紀もの間に、東金堂は5回にわたる火災に遭った。最も新しいものは1411年の火災である。現在の東金堂は1415年に建てられた。室町時代（1336～1573年）の建築だが、建物の正面の幅全体にわたって広がっている屋根付きのポーチや、垂木を支える3段の腕木、（勾配屋根ではなく）寄棟造の屋根、タイルを敷いた石の床など、意図的に古典的な建築の特徴が取り入れられ、奈良時代（710～794年）に建てられた最初の建築を想起させる様式となっている。今日、東金堂に収められている宝物は、その黄金の光背から放たれる光を反射することによって、仏教の教えを思い起こさせている。